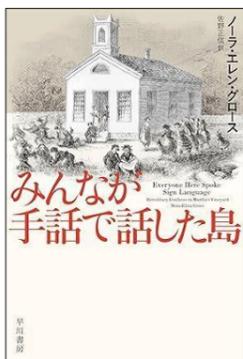


ようこそ！手話言語の世界へ

「宍粟市みんなの心つなぐ手話言語条例」が制定されて10年になります。この条例は、手話は言語であるという認識に基づき、手話を使って安心して暮らせる宍粟市をめざして制定されました。

制定10周年の機会に、市内の図書館・図書室では聴覚障がいについて書かれた本や手話の入門書などを巡回展示しています。展示している本の中から、一部をご紹介します。



『みんなが手話で話した島』
ノーラ・エレン・グロース 著 佐野 正信 訳
(早川書房)

ボストンの南にあるマーサズ・ヴィンヤード島では、20世紀初頭まで多くの人が手話をつかって話していました。この島は耳が聞こえない人の割合が高かったため、手話は特別なものではなく、日常的に必要なものだったのです。文化人類学者の調査により、聞こえない人と聞こえる人の垣根がない社会のすがたが浮かび上がります。



『オリオンは静かに詠う』
村崎 なぎこ 著 (小学館)

ろう学校高等部に通う咲季はふらりと入ったカフェで競技かるたに出会いました。「聴者の世界」を避けてきた少女が新たな一步を踏み出す様子が、咲季自身、ライバル、師匠、手話通訳士、四人の視点で描かれた青春小説です。



『聴導犬のなみだ』
良きパートナーとの感動の物語』
野中 圭一郎 著 (プレジデント社)

聞こえない人の生活をサポートする聴導犬は、盲導犬に比べて数が少なく、あまり知られていません。動物愛護センターなどから適性のありそうな犬が選ばれ、トレーニングを受けて聴導犬となりますが、犬種も性格もばらばらな犬たちのトレーニングは試行錯誤の繰り返しです。訓練士、ユーザーの印象に残っているエピソードが紹介されています。



『ろう者の祈り 心の声に気づいてほしい』
中島 隆 著 (朝日新聞出版)

「日本で生まれ育ったのだから日本語ができて当たり前」という決めつけが差別を生み出します。手話を母語とするろう者にとっての日本語は、文法が異なる外国語と同じようなものです。特に「てにをは」の使い方や形容詞・形容動詞の活用、敬語などの習得は難しく、それを分かりやすく教えることができる人も限られています。ろう者が職場や学校で強いられている状況を伝える一冊です。



『はじめてでもそのまま使える
手話会話フレーズ 228』
鈴木 隆子 監修 (池田書店)

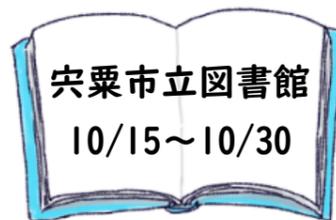
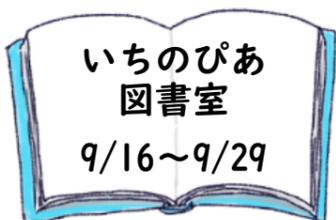
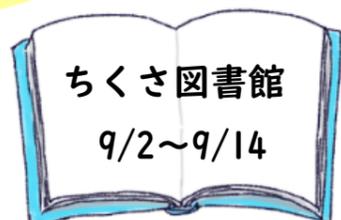
日常的な会話が「日本手話」と「日本語対应手話」の2種類で表記されていて、ふたつの手話の違いを学ぶことができます。細かなニュアンスを伝えるための表情や動作の違いが、初心者にも分かりやすく解説されています。



『親子で学ぼう！ もっとおぼえたい手話
話すことが楽しくなる「会話練習帳」』
澤田 利江 監修 齋藤 陽道 イラスト
(メイツユニバーサルコンテンツ)

手話での会話を楽しむことに重点をおいた入門書です。手指の動きだけでなく、表情や顔の動き、手の位置も解説されています。小学生にも分かりやすいように、大きなイラストで動作があらわされ、漢字にはルビがふってあります。

巡回展示の日程



※図書館・図書室により、休館日及び開館時間は異なります。